博士論文(要約)

1DKでの孤独と死、そして尊厳

：「東京桐ヶ丘都営団地」の高齢化と建替えのエスノグラフィー

Loneliness, Death and Dignity in 1DK :

An Ethnography on Aging and Reconstruction of *Kirigaoka Public Housing* in Tokyo

2016.5

東京大学

朴承賢

PARK SEUNG HYUN

論文の目次

凡例
図・写真・表一覧

序章

1. 問題提起
   1-1. 桐ヶ丘団地の高齢化と建替え
   1-2. 空間を自分のものにする試み
2. 調査地の概観
   2-1. 桐ヶ丘団地の歴史・地理
   2-2. 公営団地の高齢化と建替え
   2-3.「老人の空間」、桐ヶ丘団地
3. 研究方法
4. 老いと死
   4-1. 人類の老年
   4-2. 研究対象とされなかった老年
   4-3. パラドックスな存在としての老人
   4-4. 超高齢社会における自立の意味
   4-5. 現代の死
5. 住居と空間
   5-1. 人類の住まい
   5-2. テキストとしての住居
   5-3. 近代的住居空間
   5-4. 公共性と公用空間
   5-5. 空間支配と実践、そしてヘテロトピア
6. 論文の構成

【第Ⅰ部　団地をめぐる家族・住居規範】

第1章.「家庭」の成立と「団地族」の誕生

1.「家族団欒」の「家庭」の成立
   1-1. 家族と住居の近代化
   1-2. プライバシーへの要求
2. 戦後集合住宅の大量生産
   2-1.「住宅は住むための機械」
   2-2. 公営住宅標準モデル「51C」
3. 2DKの大量生産
   3-1. 親子と夫婦の世界
   3-2. 団地ライフ

第2章. 戦後公営住宅政策の展開と衰退

1.「国民住宅」としての出発
　1-1.「日本の再建に役立つ家庭」
　1-2.「家賃値上げ反対」
2. 家族・持ち家中心の住宅政策
3. 公営住宅政策の衰退
　3-1. 家族再生産の場としての任務の終了
　3-2.「国民住宅」から「限界集落」へ
4. 格差時代の住宅貧困
　4-1.「一億総中流」から「格差社会」へ
　4-2. 家族主義の再考

【第Ⅱ部　老いてゆく団地】

第3章. 桐ヶ丘団地の暮らし

1. 桐ヶ丘団地の誕生
　1-1. 引揚者の臨時住宅地「赤羽郷」
　1-2.「文化住宅」としての都市計画
2. 桐ヶ丘団地に刻まれている人生
3. 桐ヶ丘団地の地域コミュニティ
　3-1. 自治会:「公営方式」の住民組織
　3-2. 自治会の歴史
　3-3. シニアクラブ:地域老人会
　3-4. ふれあい館:サークル活動の空間
4. 古い住民が共有する豊かな時期
5. 住居福祉の「公平」は現場でいかに経験されるのか

第4章. 介護保険時代の老いの経験

1. 介護保険制度によるデイホームの変容
2. 介護予防の地域的実践
　2-1. デイホームの一日
　2-2. コミュニティとしてのデイホーム、その限界
3. 施設の忌避、依存の忌避
　3-1. 施設としてのデイホーム
　3-2.「デイホームには満足するが」
4. 介護保険時代の自立の意味
　4-1. 日常的な「自立」の現場
　4-2. コミュニティの官僚制化
　4-3. 自立の基盤としての「地域」
　4-4. 相互関係の中での自立と介護

【第Ⅲ部】1DK「マイホーム」での孤独と死

第5章. 建替えと高齢化がともに進む団地

1. 建替えの流れ
2. 改善事業の流れ
3. 移転がもたらす孤立の問題
   3-1.「ばらばらになる」
   3-2. 自治会の揺らぎ
   3-3. モノとの別れ

第6章. 居住の貧困

1.「無縁社会」の間取り
   1-1.「お一人なら1DK」
   1-2.「人間扱いしてない」
   1-3. 孤独の日常化
2. 建替え過程における住民の疎外
   2-1.「建替えが終わる頃にはこの世にいない」
   2-2.「どうせ税金でやっているから」
3. コモンズ的公共空間の衰退

第7章. 孤独死

1.「孤独死が一番怖い」
2. 自己責任としての孤独死
3. おくりびとの不在
4. 生の領域としてのプライバシー
5. 他人の意味

終章

1.「老い」の「空間」
2. 孤独と尊厳
3. 生きられた空間

年表：桐ヶ丘団地と日本住宅政策の変容
参考文献

1）単行本・論文
2）政府刊行物・地域資料
3）映画・ドキュメンタリー

図・写真・表一覧

図0-1）グリーンハイツ都営住宅建設予定地
図0-2）建替え以前の桐ヶ丘団地図
図0-3）桐ヶ丘団地のW地区、E地区、N地区
図0-4）2008年当時の都営桐ヶ丘団地の鳥瞰図
図0-5）2015年現在の桐ヶ丘団地現況図
図1-1）中廊下住宅の図案
図1-2）吉武研究室による51Cの原案平面
図1-3）1955年公団アパートの第1号の2DK
図3-1）赤羽郷の住まい、陸軍火薬庫の全貌図
図5-1）都営桐ヶ丘団地第4期・第5期建替え事業計画図
図5-2）建替え工事以前と以後の住宅の比較
図5-3）桐ヶ丘団地住宅改善実施概況
図6-1）ある新築号棟の1階の配置
図6-2）桐ヶ丘団地新築1DKの間取り
図6-3）桐ヶ丘団地新築3DKの間取り

写真2-1）家賃値上げ反対の取り組み
写真3-1）赤羽郷時代のどろんこの道
写真3-2）桐ヶ丘文化生活協同組合の風景
写真3-3）団地住宅と火薬庫住宅
写真3-4）完成当時の桐ヶ丘団地
写真3-5）完成当時の桐ヶ丘団地
写真3-6）E47棟の外観
写真3-7）E47棟のフロアから見る中庭の様子
写真3-8）桐ヶ丘N地区第1自治会の祭
写真3-9）桐ヶ丘N地区第2自治会創立50年記念式
写真3-10）地域シニアクラブの活動
写真3-11）桐ヶ丘ブロックの輪投げ大会の様子
写真3-12）N地区シニアクラブのカラオケ会の「ボケない歌」
写真3-13） ふれあい館の活動
写真3-14） ふれあい館の活動
写真3-15）新居を見に出かけた人たち

写真4-1）桐ヶ丘デイホームの外観
写真4-2）デイホームの内部の配置
写真4-3）デイホームの活動の様子
写真4-4）ホホエミ会の脳トレ会
写真4-5） 桐ヶ丘デイホームでのホホエミサロン￥
写真5-1）建替え予定地区の改善事業後の様子
写真5-2）建替え予定地区の改善事業後の様子
写真6-1）各フロア10戸が並んでいる新築号棟
写真6-2）引っ込んでいる玄関の様子
写真6-3）建替え以前の玄関の並び方
写真6-4）新築号館の玄関の並び方
写真6-5）桐ヶ丘地域振興室手前のE1号館の撤去前の様子
写真6-6）写真6-5のE1号館の撤去後の様子
写真6-7）桐ヶ丘団地N地区の公用空間の庭
写真6-8）桐ヶ丘団地N地区の公用空間の庭

表0-1）都営住宅における年齢別世帯割合の推移
表0-2）一人暮らし高齢者の動向
表0-3）都営住宅のストック
表2-1）最低住居面積水準未満世帯の状況
表2-2）東京都や北区における借家の家賃
表2-3）公営住宅募集戸数・応募倍率の推移
表2-4）公営住宅入居者の収入分位の推移
表2-5）東京都における生活保護（住宅扶助）受給世帯の状況
表2-6）都営住宅における生活保護受給世帯の居住状況
表2-7）都営住宅における収入超過者・高額所得者の推移
表3-1）桐ヶ丘団地の年度別建設棟数・戸数（1954年～1976年）
表3-2）桐ヶ丘団地地域自治会の結成一覧（1959年～1974年）
表5-1）1996年、建替えがスタートした時期の計画
表5-2）住宅建設の建替え事業実績
表5-3）桐ヶ丘団地の建替え事業における公益的施設計画
表5-4）建替えによる移転手続きの一例
表5-5）移転対象者の内訳
表5-6）表5-5の移転対象者の移転先住宅概要

序章

1. 問題提起

1-1. 桐ヶ丘団地の高齢化と建替え

調査を開始した当初の筆者の問題意識は、どうして東京という大都市の中に「高齢者ばかり」といわれる住居空間が存在するようになったのだろうか、ということであった。階級やエスニシティによる居住地の分化は、あらゆる都市の普遍的な現象である。しかし、年齢による居住地の分離が著しく、大規模の団地が「高齢者施設化」したとまで批判されるということは、非常にユニークな現象に思われた。本稿では、東京都北区「桐ヶ丘都営団地」でのフィールドワークを通じて、住民の高齢化、建替え[1]による建造環境の変化や移転、住居福祉の後退という複合的な変化に焦点を当て、「孤独死」に極端に現れる老年の「孤独」の問題を議論したい。

筆者が2008年9月からフィールドワークを行ってきた地域は、東京都北区に位置する桐ヶ丘都営団地である。桐ヶ丘団地は北区桐ヶ丘1、2丁目に所在し、1954年から1976年までに建設された、総5,020戸の大規模団地である。桐ヶ丘団地の建築の最中であった1972年は、プルーイット・アイゴーの爆破により、都市計画のグローバル・スタンダードへの問題意識が深められた時期でもある[2]。ジェイン・ジェイコブズは、1961年にすでに、*Death And Life of Amerian Great Cities*において、近代建築思想による都市計画を批判した。彼女は、戦後アメリカにおける一方的な再整備事業は、既存住民の社会的ネットワークを破壊して都市の活気を落としただけではなく、犯罪の危険性まで高めたと指摘し、古い町の小さなストリートこそが安全で活気に満ちた都市生活を保障すると主張したのだ。

戦後の建てられたばかりの桐ヶ丘団地は、反復的で無味乾燥なコンクリートの外観に他所人が集まってきた典型的な大規模開発地であった。にもかかわらず、桐ヶ丘団地は、「団地の下町」と呼ばれるほどの活気あふれる空間として誕生した。住民たちは「夢のような2DK」に入居して、ダイニン

---

[1] 桐ヶ丘団地では現在「桐ヶ丘団地再生計画」が進行中であり、1996年から建物の老朽化による建替えや改善工事が行われている。建替えの過程に関しては第5章で詳述する。

[2] プルーイット・アイゴー（Pruitt-Igoe）は、アメリカ、セントルイスにあった公営住宅団地である。1951年にスラムを取り壊し、建築家ミノル・ヤマサキが改良住宅として設計して、1956年に完成した。プルーイット・アイゴーは27haの敷地に2,870世帯が居住し、11階建ての33号棟が立ち並ぶ、現代的設備を備えた快適な空間として出発した。しかし、団地そのものが犯罪や破壊の温床となるなど、環境が著しく悪化し、1972年に爆破解体される。

グ・キッチン用のテーブルクロスを選んだだけではなく、建てられた順番に自治会をつくり、公営団地ならではの方式を定着させた。泥だらけの空き地は、住民を孤立させるどころか、環境づくりのための地域組織の結成までをも導いたのだ。桐ヶ丘団地に古くから住んでいる住民たちは、「今は想像もできないだろうが、子供が山ほど多かった」という言葉で、「子育ての時代」を楽しそうに回想した。

しかし、1954年の団地建設[3]から70年余りの時間が経過した今の桐ヶ丘団地の状況は、完全に変わっていた。桐ヶ丘都営団地は高齢化率が50%を超える地域となっており、自治会の役員たちは「これ以上高齢化すると自治会は維持できない」と桐ヶ丘団地の高齢化の深刻性を語っていた。住民たちが感じる高齢化は実際よりもさらに高く、高齢化率の統計を聞いて、「高齢者ばかりなのに、50%しかないのか」とむしろ驚いたりした。日本の高齢化がますます深刻なものとなっている中で、桐ヶ丘団地は「高齢者施設化」したと批判される空間となっているのだ。

フィールドワークが始まる段階では、大都市に位置する団地の高齢化は、非常に独特な現象だと思われた。しかし、調査の過程で、大都市における集合住宅の高齢化は、高齢化を経験しているあらゆる社会においてそれほど珍しい現象ではないということを知り、改めて驚いた。ドイツの映像人類学作品『グリンデル高層住宅』[4]に映された、ドイツにおける最初のモダンな高層団地の誕生と衰退の過程、すなわち住民たちが語る長年の団地暮らしや高齢化と老朽化、コミュニティの衰退の経験は、桐ヶ丘団地のそれと驚くほど似ていた。

桐ヶ丘団地の暮らしがさらに筆者の関心を引いたのは、現在団地で行われている建替えに対して、住民たちが「建替えで団地が完全に変わった」と話していたためである。特に、1996年から始まった建替えやそれに伴う移転は、団地コミュニティの問題でもあった。建替えの計画者たちは、大部分の移動は団地内でのものなので、建替えはコミュニティにそれほど影響を及ぼさないと語った。しかし、高齢の住民たちにとって重要なのは、団地内に知人がどれだけ住んでいるかではなかった。ドアを開け出入りするとき、もしくは洗濯物を干しにベランダに出たとき、偶然に出会って立ち話することこそが住民たちの慣れ親しんだ話し合いの方式である。それゆえ、住民たちが表現する通り、「近くても一棟違うと隣りがまるきり違う」のである。建替えによる移転は、近隣の住民どうしの日常的で自

---

[3] 1952年4月に、東京都は赤羽郷の都市開発計画を発表し、「グリーンハイツ都営住宅」建設計画を策定した。そして、1954年10月、この計画を「桐ヶ丘文化住宅」建設計画に変更し、団地建設が本格化される。文献によっては、桐ヶ丘団地建設が1952年からスタートしたと記述される場合もあるが、本稿においては、表3-1のような東京都都市整備局の年表に従い、1954年から1976年までの桐ヶ丘団地建設の歴史を辿る。また、世帯数に関しても、総5,920戸として記述されている文献もあるが、東京都都市整備局が提示する完工戸数を基準にして、本稿においては総5,020戸として把握する。

[4] ハンブルク大学の民俗学研究所の2009年マギスター卒業作品として制作されたマイケ・ミュラーの映像人類学作品であり、第二次世界大戦後に建てられたドイツ最初の「高層集合住宅」、グリンデルの暮らしを、住民たちとのインタビューを通じて描いている。住民たちがグリンデル住宅に文化財的価値を付与するなど、福祉住宅としての桐ヶ丘団地とはかなり異なる社会的背景を持つ住宅でもある。にもかかわらず、『グリンデル高層住宅』の映像に登場する人物たちの口述は、桐ヶ丘団地住民たちの物語とかなり似ていた。

然な相互作用を急激に萎縮させたのだ。高齢化と建替えが重なって進むことによって、桐ヶ丘団地において「孤独」はさらに深刻な問題となっている。

1-2. 空間を自分のものにする試み

1946年に刊行された『先祖の話』において柳田国男は、戦争の廃墟の中で45枚の位牌を背負って、雨の中を傘も持たずに、途方に暮れてとぼとぼ道を歩んでいた老人の姿を思い浮べる。そこには、先祖との関係によって自分自身を位置づける存在としての個人が描かれている［柳田 1975］。小津安二郎の1953年の映画、『東京物語』は高度成長期の日本社会における「伝統的な家族の解体」を描いた映画だといわれる。しかし、「解体された家族」の老母は、家族に囲まれて「家」で死を迎えることのできた最後の世代であり、また、血圧と脈拍で死の兆候を読み、寿命延長の試みなしに「安らかな死」を迎えた最後の世代であったかもしれない。45枚の位牌を背負った老人の姿や『東京物語』の母親の臨終の様子から、この半世紀余りで家族規範や住居空間、そして死をめぐる諸実践がいかに激変してきたのかがさらに明らかになる。

「私は大正生まれだ」と自己紹介する桐ヶ丘団地のある住民は、昔話のように長屋生活を語りながら、団地に入居した時の喜びを回想する。彼女は現在、かつては彼女の「頭の中になかった」間取りである1DKの部屋で暮らしている。日本社会において、「団地」は戦後家族と住まいの在り様の変容と、そこに絡んでいる国家政策や社会経済的状況が明確に現れる空間である。家族が生活できるような賃金を稼ぐ夫と専業主婦の妻、そして未婚の子供という「標準家族」は、人類の歴史上ほんの短い間にのみ可能であった戦後の家族規範であった。家族の私的空間を実現させた「団地」に象徴される住宅の大量生産がその背景にあったのは言うまでもない。そして今、私たちは、少子高齢化、家族解体の時代を歩んでいる。本論文は郊外ニュータウンが現れ、そして持ち家願望に支配されていった日本の住居状況の中で、公営住宅に取り残された人たちの物語であり、借家でありながらも、それを「マイホーム」とみなし、「終の棲家」と思い込んだ人びとの物語である。

マイホームは、「nLDK」という記号によって象徴的に提示される「商品」としての住宅、持ち家の取得を通じての私的領域の確定を示す言葉である［山本 2014］。福祉制度を基盤にした借家を前提とする公営住宅における住まい方はマイホームという言葉の一般的な使い方とはずれている。しかし、本稿においては、住宅所有の可否ではなく、近代的住居空間が目指してきた私的領域という意味で「マイホーム」という言葉を使いたい。国家や労働の世界から私的世界への価値づけの移行は、日本では「マイホーム主義」という表現で語られてきた。「マイホーム」とは、コミュニティから切り離された、個人を取り囲む他者の介入から自由な空間であり、誰からも妨害されないものであるとされてきたのだ［片桐 1996：5］。建替えによる最も大きな変化であり、住民たちが建替えに関して最も批判する点は、40%に及ぶ1DKの建設である。既存の団地の2DKが「標準家族」向けに建てられた空間

であったならば、1DKは家族時代が終わってから残された「個人」を容れる、文字どおり「マイ」ホームとでも呼ぶべき空間である。ここにおいて、「マイ」は存在方式の問題となるのだ。

そのような中で、「孤独死」[5]への不安は、桐ヶ丘団地の住民たちが感じている日常的な孤独の問題を露骨に表していた。孤独死は、メディアからはスキャンダル的な「事件」として報道されることもあるが、近所の孤独死を異臭で経験した桐ヶ丘団地の住民たちにとって、その不安感は具体的なものであった。桐ヶ丘団地の住民たちは「孤独死が最も怖い」と語る。閉ざされた家の中から広がる異臭によって発見され、「公共」が関与する死は、人類がいまだかつて経験したことのない死の姿である。孤独死が当惑感を与えるのは、それが、「自立」した成人の「自己責任」の領域としての「マイホーム」で、死に至るまで、誰かが途方もなく孤立させられていたのだということを知らしめるためであるだろう。孤独死は隠蔽されていた現代的な死の「転倒」であり、個人主義の「極限」でもある。

近所に住む人の孤独死を経験し、自分自身の孤独を恐れている住民たちにとって、他人の存在はあまりにも切実なものとなっている。彼（女）たちは東日本大震災の際、これまでも切実な時に国の力は決して届かなかったし、避難所があったとしてもそこまで行けなかったということを思い出した。そして、「備蓄があっても、辿り着けない。年寄りには絶対無理。寝たきりとか自分で避難できない老人が多い」と、緊急時には隣り近所が最も大切な存在であることを強調した。超高齢社会、桐ヶ丘団地において、他人との絆は、生活を豊かにすることを超えて、生存の条件のように切実なものとなっている。それゆえに、コミュニティに関する諸議論は、たんなる失われた過去のものを回復しようとする試みではなく、今の時代において最も未来志向的なものなのだ。

岩本通弥［2015］は、「高層集合住宅」の暮らしに関する研究において、「当たり前」に改めて光を当てることによって、自らの自明な世界を「異化」する眼差しを差し挟むきっかけや、自らの生活世界の自明性という桎梏から解放されるきっかけを探る。今日において、住宅とは、住宅政策や資本の支配下に置かれた明白な資本主義的商品である。この中で、日常的実践は都市計画者が立てた空間秩序に圧倒されてしまう。さらに、福祉住宅としての公営団地における、年金生活者としての高齢者の生活は、彼（女）らを囲む社会的制約や規制に縛られてもいる。にもかかわらず、彼(女)らの日常的な住宅での経験は、決して空虚なものではない。彼（女）らがある空間や場所に住むことで、親しみに満ちた私的空間が構成される。居住は生活世界の空間的基盤であり、生活世界が広がる実存の場所であるのだ。

筆者は、桐ヶ丘団地に古くから住む住民の親密感を基礎として地域に開かれていたグループやサークルの存在、鍵を互いに預けておくような信頼関係、何かを植えたりする小さな街角、そして、エレベーターの前にちょっと腰かけるためのベンチを置いておくような住民の動きに着目する。クリスチャン・ノルベルグ=シュルツ［1991:33-34］は、 近代建築を「内部と外部の新たな関係」として規定する。ここで彼は、内と外を区別し、両者の間で意味深い関係を作り出す根源的手段として、「門」

[5] 孤独死に関しては第7章で詳述する。

に着目した。彼の議論は、団地が日本社会において憧れの的であった当時、シリンダー鍵が団地の近代性を象徴していたことを思い起こさせる。団地においても、シリンダー鍵に象徴されるような形で内部と外部の新たな関係が創り出され、外部と隔絶した新しい私的領域が生まれたのである。これに対して、超高齢化時代における公共住宅の暮らしを明らかにする過程は、近代建築がつくり出した内部と外部の新たな関係と、それによって生まれた自立した個人の自己責任にゆだねられた私的領域としての近代的住居空間の、矛盾と限界を明らかにする過程であるといえる。また、それは、私的領域と公的領域の徹底した分離がもたらす諸問題に対する問題提起であり、公共性の回復を読み解く過程でもある。

戦後の団地暮らしに関する記述は、近代建築のユートピアへの夢、そしてその挫折の歴史の記録となり得る。本論文は、老年の孤独をもたらした空間支配の歴史を遡る一方、これと同時に、空間を自分のものにする試みとその空間的想像力を議論することで、住居空間の在り方を人間の尊厳の問題として論じようとするものである。

2. 論文の構成

序章では、本稿の問題意識を明らかにする一方、調査地を概観し、研究方法を記述した。そして、桐ヶ丘団地という「老い」の「空間」における「老いの経験」を理解するための踏み台として、人類学の領域で「老年」はいかに論じられてきたのかを明らかにした、また、「空間」、特に「住居空間」や「公用空間」に関する人類学的関心はいかに展開されてきたのかを探り、空間支配や日常的な実践の意味を理解するための空間理論を検討した。

第Ⅰ部では、桐ヶ丘公営団地という空間が生産され、現在にたどり着くまでの歴史的な背景を遡りたい。そのため、家庭の成立から団地族の誕生まで、日本における近代家族と住居の規範がいかに変容してきたのかを検討する。また、戦後日本における公共住宅政策の変容過程も触れる。第1章では、家族規範が実践される空間としての住まい、空間を通じて強化される家族規範に焦点を当て、その最も重要な動力である国家主導の家族・住宅政策を考察する。また、住居の大量生産における思想的な基盤としての近代建築思想を検討する。第2章では、国民住宅としての公営住宅から議論をはじめ、戦後の公共住宅政策の展開過程を検討する。住宅金融公庫、公営住宅、公団住宅の三つの戦後住宅政策の法制度を検討し、家族中心、持ち家中心となっている戦後の公共住宅政策の中で、公営住宅は社会的にいかなる空間として位置づけられてきたのかを考察する。特に、戦後日本の公営住宅政策の成立から新自由主義的政策の中での住宅福祉の後退過程を明らかにすることで、公営団地が「老人施設化」したと批判されるに至る過程を議論する。

第Ⅱ部では、老いてゆく桐ヶ丘団地を背景にして、団地暮らしの歩みを探る。そして団地内に位置

する高齢者介護予防施設であるデイホームを通じて、高齢社会における高齢者福祉の在り様を検討するとともに、「地域」、「自立」の意味を追究する。第3章では、引揚者の臨時住宅地「赤羽郷」から桐ヶ丘団地の誕生までを照らし出し、地域自治会を中心に地域に根を下したコミュニティの歴史を振り返る。また、古くから住んでいる住民が共有する豊かな時期と、最近の衰退する団地の状況を対比して、住居福祉の「公平」は現場でいかに経験されるのかを明らかにする。第4章では、桐ヶ丘デイホームでのフィールドワークから、自立を強調する介護保険政策が地域でいかに展開され、いかに経験されているのかを考察し、現代社会における高齢者の「自立」の意味を改めて問い直す。

第Ⅲ部では現在桐ヶ丘団地の暮らしにおいて根本的な変化をもたらしている建替えに焦点を当てる。そして、高齢化と建替えがともに進む中での「居住の貧困」がもたらす、死に至る「孤独」の問題を議論する。第5章では、建替えや改善事業の流れ、そして建替えによる移転がもたらす諸問題を居住者たちへのインタビューを中心に考察する。桐ヶ丘団地の建替えによる最も大きな変化は、40%に至る1DKの建設である。第6章では、1DKでの一人暮らし高齢者の住まいを通じて、シングル時代の住まい、「無縁社会」[6]の住まいの有り方を論じる。そして、住民たちが語る不安と孤立、疎外の問題に焦点を当てて、「居住と建築の分離」、「公用空間の喪失」がもたらす「住居の貧困」、「孤独の日常化」を議論する。第7章では、「孤独死が最も怖い」という住民たちの語りから、団地における孤独死をめぐる経験を探る一方、その生活世界における孤独死の意味を明らかにする。そして、孤独な死こそ他者に依存する死であるという立場から、プライバシーの意味を問い直す一方、都市高齢者の日常における他人の意味を追究する。終章では、本稿の議論をまとめる一方、社会的排除へ抵抗する空間的想像力のきっかけを照らし出す。

---

[6] 2010年1月に放映されたNHKスペシャル『無縁社会：“無縁死”3万2千人の衝撃』は、孤独死や誰にも引き取り手のない無縁死が頻発する現代日本の社会状況を告発したが、“3万2千人”という数値とともに「無縁社会」という言葉は、まさに大きな「衝撃」を社会に与えた。NHKはこのドキュメンタリーを起点として、後続番組を多数制作し、その一連のキャンペーンによって、この言葉は2010年度の流行語大賞にもノミネートされ、同年の第58回菊池寛賞を獲得するなど、広く人口に膾炙した。しかし、その後、そのネーミングや過剰演出だったことに対する批判もあり、現在ではほとんど使用されることのできない用語となっている。孤独死や類似語彙に関しては、第7章で検討するが、「孤立社会」など類義語も現れてきているものの、単身世帯が増え、人と人との関係が希薄となりつつある、現代社会の、すなわち血縁・地縁・社縁といった既存の「縁」が 弱体化した「全体状況」の一面を指し示す言葉として、本稿ではひとまず「無縁社会」を使用する。

終章

1. 「老い」の「空間」

桐ヶ丘団地という「老いの空間」における「老いの経験」を明らかにすることが本稿の課題であった。筆者は三つの部分に分けて、議論を展開した。第Ⅰ部では、桐ヶ丘公営団地という空間の誕生から現在にたどり着くまでの社会歴史的な背景を遡った。まず、第1章では、「家族団欒」や「プライバシー」が強調されていく日本における近代家族と住居規範の形成過程を議論し、その最も重要な動力としての国家主導の家族・住宅政策を考察した。また、近代的集合住宅「団地」の大量生産における思想的な基盤を検討し、団地という空間が導いた団地ライフのあり様を明らかにした。第2章では戦後日本における住宅福祉の根幹として公営住宅の変容過程へ焦点を当てた。家族中心、持ち家中心の公共住宅政策の中で、公営住宅がいかなる空間として位置づけられてきたのかを明らかにした。特に、戦後日本の公営住宅政策の成立から新自由主義的政策への移行の中での住宅福祉の後退過程を明らかにする一方、「世帯単位主義」がもたらす「家族」の歪曲の問題を考察した。

第Ⅱ部では、老いてゆく桐ヶ丘団地を背景にして団地暮らしの歩み、団地をめぐる高齢者福祉の在り様を検討することで「地域」や「自立」の意味を追究した。第3章では、桐ヶ丘団地建設の社会的背景、また地域自治会を中心に地域に根を下ろしているコミュニティの歴史を振り返った。桐ヶ丘団地は定住志向が高い空間であり、入居当時の喜びを鮮やかに記憶する古い住民たちが共有する歴史こそが団地コミュニティの基盤を形成してきた。古くから住んでいる住民たちが共有する豊かな時期と、最近の衰退する団地の状況を対比して、住居福祉の「公平」は現場でいかに経験されるのかを明らかにした。

第4章では、桐ヶ丘デイホームでのフィールドワークから、介護保険時代における「自立」と「地域」の意味を問い直した。地域における自立した生活を強調する高齢者福祉の方向は、財政的な問題から定められたものでもあるが、一方では、高齢者自らが追求してやまない生き方の問題でもある。「自立」の追求は、自立しているからこそ可能な人間的な尊厳の問題でもある。一方、「自立」とは、相手との関係の脈絡の中でこそ成り立ち得る状態であり、それゆえ、自立を支える日常的な関係はさらに重要な意味を持つ。このような観点から、第Ⅲ部では「1DK」の建設をはじめ、高齢化と建替えがともに進んでいる団地暮らしの在り様を批判的に検討した。

第Ⅲ部では、現在行われている建替えに焦点を当てて、高齢化と建替えがともに進むことによる団地暮らしの変容を明らかにした。そこで、「建築」と「居住」の分離がもたらす「居住の貧困」、空間的疎外があおる「孤独」の問題を議論した。第5章では、建替えや改善事業の流れ、そして建替え

による移転がもたらす高齢住民の社会的な孤立の問題を考察した。建替えに伴う移転の過程における近隣関係の断絶、自治会の揺らぎ、物理的景観の急変やモノとの別れを中心に、「建替えで団地が完全に変わった」という発言の意味を追究し、建替えがもたらす高齢住民の社会的孤立の問題を明確にした。第6章では、1DKの暮らしを中心に新自由主義的な住宅政策の中での建替えの方向を批判的に検討した。桐ヶ丘団地の建替えによる最も大きな変化は、40%にのぼる1DKの建設である。閉じられた1DKは、日常的に自立を相互維持する関係を遮断してしまうという点で、「地域中心」、「自立重視」の現在の高齢者福祉のスローガンと逆の方向を向いていることを明らかにした。このような空間配置の問題は、公用空間の衰退においてさらに目立っている。

第7章では、「孤独死が最も怖い」と語る住民たちの発言から、団地における孤独死をめぐる経験を探った。孤独な死こそ他者に依存する死であるとの立場から孤独死の意味を追究し、死がまともに位置づけられずには生の領域もまともに生きられないことを議論した。個人主義の極限としての孤独死の問題にあたって、生の領域を構成する能動的で自律的な能力としてプライバシーの意味を問い直す一方、他人の意味を照らし出した。

2. 孤独と尊厳

1997年に開かれた国際シンポジウム「世界の中のル・コルビュジエ：ル・コルビュジエと日本」の発表を収録した報告書には日本建築におけるル・コルビュジエの影響が触れられている。その中で、建築学者槇文彦［1999：19-28］は1950年代から60年代にかけて日本においてル・コルビュジエが与えた影響は特に「ユルバニズム」、「ユートピア」思想であったと議論する。ル・コルビュジエのユートピアは、テクノ･ユートピアというべきであり、これはモダニズムの思想が具現される都市像であった。団地経営とは、緑地の高層住宅からなるユートピアの空間計画であって、「憧れの団地」とはそのユートピア的な住居への期待が込められているものでもあっただろう。しかし、ユートピアは、団地入居の競争率が物語るように、資本に包摂され、商品化されやすい空間でもあった。「団地族」、「団地ライフ」がつい「消費する家族」に繋がっていってしまったことは偶然ではないだろう。

「団地サイズ」2DKが「標準家族」の空間であったなら、1DKはその家族時代が終わってから残された「個人」を容れる住まいである。「一人暮らしにあまりにもピッタリする」1DKは、「家は住むための機械」とのル･コルビュジエの主張を改めて浮かびあがらせる。機能的合理性や低費用を最優先の課題とする新自由主義的な建替えの方向で、桐ヶ丘団地は、1DKにふさわしい生活以上の生き方を想像しにくい「個」の世界となっており、孤独が日常化した空間となりつつある。

パットナム ［2013］は、社会的な連帯や結束が解体されているアメリカ社会の姿を、「孤独なボーリング（bowling alone）」と表現した。孤独なボーリングは桐ヶ丘団地のある高齢の住民がコン

ビニエンス・ストアでお弁当を買う様子とも似ており、開店前からパチンコ屋に並んでいる人たちの様子とも似ている。社会的資本が最も必要な、まさにその場所に、社会的資本が最も欠如しているのだ。しばしばコミュニティを求めることは、過去のもの、伝統的な何かを取り戻したり復活させることだと誤解されたりする。しかし、今日においてコミュニティとは、私たちが直面している低成長と高齢化、貧困と孤独の問題に向き合う、最も未来志向的な弱者の連帯を意味する。

団地の住民たちは「孤独死が怖い」と話しながら、「孤独死」は今後もっと深刻な問題となるだろうと語る。筆者は本論文のテーマに関して、「なぜ孤独死が悪いか」という質問を受けたりした。おおむね、この質問の意図は、「誰でも死ぬし、死んだらどうせ終わりではないか」ということであった。それは、「死」とは無関係なもののように存在している「一般の生活」の中では、反駁しにくい質問でもあった。しかし、再び団地の世界に入ると、「なぜ孤独死が悪いのか」という態度こそ、「死」の問題がいかに生の領域から追い出されているのかを示していることに改めて気づいた。現代社会における死の隠蔽は、生の隠蔽にほかならない。生の有限性を隠蔽することで、生に対する無関心な態度を生むのだ。

最近の尊厳ある死への関心、自分の死を省察する諸実践から見てとれるように、死の問題は人間の尊厳の問題である。「なぜ孤独死が悪いか」という質問は、「人間の尊厳性」がいかに抽象的なものとして語られているのかを表す。「高齢者ばかり」、「一人暮らしは1DK」という言葉や、孤独死の不安から緊急ブザーのペンダントをかける様子、孤独死が嫌われる団地の現場が、なぜ「問題」として感じられるのだろうか。それは、究極に、その現場が人間尊厳への尊重を欠いているためではないだろうか。

人間の尊厳性は抽象的なものとして語られがちだが、にもかかわらず、尊厳を失うことへの恐れは、日常的に経験される。そして、介護保険を使うことに対して「尊厳を傷つけたくない気持ちかな。絶対言わない」との発話からも気づかされるように、尊厳の問題は他人との関わりの中でさらに重くなる。また、孤独な死の異臭が広がらないうちに誰かに発見されるための工夫からも見られるように、人びとは死後を想像する中でも、他人の存在を意識し、尊厳の傷つけられた不名誉な死を恐れる。人の生が他人の存在を必要とするように、人の死も他人との関係の中に置かれているのだ。

3. 生きられた空間

1956年、『経済白書』は「もはや『戦後』ではない」と宣言した。しかし、1959年の『建設白書』は、「住宅はまだ『戦後』である」とする。また、1979年に「ウサギ小屋」が一躍流行語となったように、日本において経済規模や消費水準に比べて、住宅水準は相対的に遅れていると評価されてきた。高度経済成長を経る中で、日本政府は「貧困はもうなくなった」と述べ、「貧困」という言葉は政府

資料および日本で刊行される書物から消えていった。しかし、1970年代末、早川和夫［1979］は『住宅貧乏物語』で、過密住居がもたらす悲惨な事故、家計を破壊する住居費の問題を報告した。彼は、日本の住生活は「経済大国の豊かさの中の住宅貧窮」というべきだと批判した。さらに、1995年の阪神・淡路大地震の被災者の大部分は「住宅被害」の犠牲者であって、現代日本の住居問題を暴露した。

本稿では、建替えの過程において、「マイホーム」という存在方式がさらに強化され、「他者の不在」が日常化される側面を考察した。入居階層を絞って、最も適切な入居者を収容する公営住宅制度の方針からは、自立可能性によって、介護予防施設から介護施設へと移らせるシステムと同様な、不具合な合理性が感じられる。施設の移動が「自立できない」存在であるため我慢しなければならない状況であることと同様に、1DKという空間は、福祉の受恵者であるため甘受しなければならない社会的制裁でもある。デイホームの利用者たちが口癖のように「ボケないように」とわざと自分たちの脆弱性を表すことで自尊感を守ろうとすることと同様、桐ヶ丘団地の高齢者は、「建替えが終わる頃は、私はこの世にいない」と自ら置かれている受動的な立場を冗談としてもみ消す。「人間扱いではない」、「税金でやっているから仕方ない」、「ボケないように」、「建替えが終わる頃にはこの世にいない」、「恥ずかしいからかな」という住民たちの言葉には、この空間がもたらす疎外の問題が現れている。これは、福祉制度は「成熟」したにもかかわらず、「自立できない者」に課される資本主義社会における疎外はさらに深刻化していることを示している。

2014年11月頃、建替えられたある新築号館の前に、この季節には珍しく花が植えられていた。小石で自身が植えたものを囲んでおいた小庭であった。そして、偶然にも水まきに出る彼女に出会うようになった。彼女は近隣の友人たちも呼んで気軽に筆者を自宅へ招待してくれた。彼女は、中国からの引揚げで東京に来て、「運が良くて」都営団地に定着したと自分のライフヒストリーを語ってくれた。彼女は夫と一緒に新築の2DKに引っ越ししたが、しばらくして夫は癌で死亡し、その後母親を連れてきて自宅で介護した。そのうち母親も死亡し、今は一人で住んでいるという。彼女は、今年は同じ号館の1DKの住民4人が死亡して、新しい居住者を待っているという状況など、詳細に近隣の状況を話してくれた。彼女と毎日団地内を散歩するという近所の女性は、赤羽郷時代からこの地域に住んできたと自己紹介をした。この二人の親しみは、長い付き合いに加え、宗教的な志向が一致したためでもあって、お互いに自宅を訪問したり、宗教集会へ参席したりしていた。豊かな近隣関係を持つことや自宅へ気軽に隣りを招待することは、「好きだから勝手に」空き地に花を植えることと無関係なものではないと思われた。

新たな人類学的マテリアル・カルチュア研究を開拓するダニエル・ミラーはイギリス北ロンドンにおけるパブリック・ハウジングの研究から、行政によって供給された設備の改造、改装の履歴を「疎外された環境の領有」に向けたプロセスとして論じる。そして、自分のアイデンティティをモノに表すこの領有のプロセスは、社会関係の在り方と密接にかかわっていることを観察する。また、ミラーは、社会関係を構築するプロセスにおいて付可欠な要素になるとき、モノは「譲渡されえない」性質、「かけがえのなさ」を獲得すると解釈する［Miller 1988；祐成 2008：20］。個人的に庭を育てる行

為は、領有の可能性が「マイホーム」の境界を越えていることによって、コモンズの可能性を切り開き、さらに積極的な領有の意味を帯びる。親密な領域を公的空間へと拡張させて庭を育てることで私的領域を持続的に自己コントロールすることは、疎外されない生の可能性を主張する積極的な行為であるのだ。自然物の躍動感の前で、他人への慣習的な境界は一瞬消えてしまう。

その領有の行為、領有の可能性が「マイホーム」の境界を越えて、「内」と「外」の新たな関係の場を開いていく過程は、現在的配置の重力場から自由な空間、つまりヘテロトピアの概念ともつながる。ヘテロトピアは支配権力が完全なものではないということ表す試みや想像力が空間を媒体として現れる多様な実践を意味する［Foucault 2014］。ヘテロトピアは、実在する空間であるがゆえに、他のすべての場所を無化し、中性化しているような「他なる場所」、全ての場所の中に存在する、それらとは絶対的に異なった反空間(contre-espaces)であり、もっと積極的な意味として解釈すれば「対抗空間」である。ヘテロトピアは、「社会は防衛しなければならない」［Foucault 2015］というユートピアを占有する権力へ亀裂をもたらす抵抗空間であるのだ。私的領域と公的領域の分離が目立っている現代の住居空間で、特に個人耕作禁止がさらに目立つ新築された空間に花を植え、石で自分の小庭を囲んでおくことがまさにそれである。団地の猫「トラ」が家に入り込めるように、ベランダに穴を掘って、はしごをかけておくことも、「高齢者施設化」されたといわれるこの空間で見つけ出せるヘテロトピア的実践である。

ヘテロトピアは、規範化された空間的実践から脱する抵抗と転覆のきっかけとしての「生きられた空間」［Lefebvre 2011］である。ルフェーヴルは庶民の公共団地を受動的な空間実践の典型的な例として挙げた。しかし、地域に根を下した人たちが共有する生活世界の歴史からこそ、空間を自分のものにする可能性は切り拓かれる。「生きられた空間」は新たな社会関係の獲得を通して現実化される空間であり、その関係の中で掬い上げられる総体的経験こそが、権力者や都市計画者たちによってつくられる空間的秩序や社会的排除に対する抵抗と転覆の糸口であるだろう。なぜ人類が長い老年の孤独を堪えなければならないのだろうか。

年表

＜桐ヶ丘団地と日本住宅政策の変容＞

	桐ケ丘	日本住宅政策	
1918		公益住宅制度	
1920		生活改善同盟会	
1923			「住宅は住むための機械」
1926		財団法人同潤会	
1928			CIAM結成
1941		住宅営団設立	
1945		厚生省->戦災復興院	（応急越冬住宅30万戸目標）
1946	赤羽郷（500世帯）	臨時建設制限命令（15坪まで制限）	
1948		戦災復興院->建設省	
1950		住宅金融公庫	
1951		建設省公営住宅法、「51C」設計	
1954	桐ケ丘団地建設開始		
1955		日本住宅公団	2DK
1959	桐ヶ丘町内会結成		
1960	赤羽台団地建設開始		
1961			*The Death And Life of Amerian Great Cities*
1972			Pruitt-Igoe爆破
1976	桐ヶ丘団地完工（5,020世帯）		
1980		公営住宅、単身者入居許可	
1990	桐ケ丘デイホーム開設		
1996	桐ヶ丘団地建替えスタート、公営住宅入居基準引き下げ		
1999		都市基盤整備公団	
2000		介護保険制度実施	
2001	桐ヶ丘デイホーム、自立支援施設へ。やまぶき荘開設		
2004		独立法人UR都市再生機構	
2006	桐ヶ丘デイホーム、介護予防施設へ。住生活基本法（住宅政策の市場化）		
2007			Torre David占有
2010	第4期～第6期建替え工事説明会		
2015	桐ヶ丘団地第4期の建替え工事中		

参考文献

1）単行本・論文

安藤忠雄

2011 『안도 다다오가 말하는 집의 의미와 설계』송태욱（역）, 미메시스. （1996『家』星雲社.）

青柳まちこ（編）

2004 『老いの人類学』世界思想社。

Arendt, Hannah

1996 『인간의 조건』이진우·태정호（역）, 한길사.（1958 *The Human Condition*. University of Chicago Press.）

Ariès, Philippe

1997 『죽음의 역사』이종민（역）, 동문선. （1975 *Essais sur l'Histoire de la Mort en Occident du Moyen-Age à Nos Jours*. Seuil.）

2004 『죽음 앞의 인간』고선일（역）, 새물결. （1983 *Images de l' Homme Devant la Mort*. Seuil.）

有泉亨（編）

1956 『給与・公営住宅の研究』東京大学出版会。

バシュラール，ガストン

2002 『空間の詩学』 岩村行雄（訳）、筑摩書房。

ボードレール，シャルル

2006 『ボードレール：パリの憂鬱』 渡辺邦彦（訳）、みすず書房。

ボーヴォワール，シモーヌ・ド

1995 『おだやかな死』杉捷夫（訳）、紀伊國屋書店。

Beauvoir, Simone de

2002 『노년』홍상희・박혜영（역）, 책세상. （1970 *La vieillesse*. Gallimard.）

Bellah, Robert N., Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler and Steven M. Tipton

1985 *Habits of the Heart : Individualism and commitment in American life*. University of California Press.

ベネディクト，ルース

2008a 『文化の型』米山俊直（訳）、講談社。

2008b 『菊と刀』角田安正（訳）、光文社。

Benjamin, Walter

2005 『아케이드 프로젝트』조형준 (역) , 새물결. (1983 *Das Passagen-Werk.* Suhrkamp.)

Bollnow, Otto Friedrich

2011 『인간과 공간』이기숙 (역) , 에코리브르. (1963 *Mensch und Raum.* Kohlhammer.)

Bourdieu, Pierre

1977 *Outline of Theory of Practice.* Richard Nice (trans.), Cambridge University Press.

1995 『자본주의의 아비투스』최종철 (역) , 동문선. (1977 *Algérie 60 : Structures économiques et structures temporelles*. Éditions de Minuit.)

Brillembourg, Alfredo, Hubert Klumpner, Urban-Think Tank Chair of Architecture and Urban Design and ETH Zürich (photographs by Iwan Baan)

2013 *Torre David : Informal vertical communities*. Lars Muller Publishers.

Brown, Arnold S.

1990 *Social Processes of Aging and Old Age*. Prentice Hall.

Campbell, Ruth.

1984 Nursing Home and Long-term Care in Japan. *Pacific Affairs* 57(1) : 78-89.

Clark, Margaret

1967 The Anthropology of Aging : A new area for studies of culture and personality. *The Gerontologist* 7(1) : 55-64.

De Certeau, Michel

1984 *The Practice of Everyday Life.* Steven Rendall (trans.), University of California Press.

Durkheim, Émile

1960 *Le Suicide : étude de sociologie*. Les presses universitaires de France.

江上渉

1990 「団地の近隣関係とコミュニティ」『大都市の共同生活：マンション・団地の社会学』倉沢進（編）、日本評論社。

Elias, Norbert and John L. Scotson

2005『기득권자와 아웃사이더』박미애 (역) , 한길사 . (1994 *The Established and the Outsiders : A sociological enquiry into community problems*. Sage.)

Elias, Norbert

2011 『죽어가는 자의 고독』김수정 (역) , 문학동네. (1982 *Über die Einsamkeit der Sterbenden in unseren Tagen*. Suhrkamp.)

Evans-Pritchard, Edward E.

1969 *The Nuer : A description of the modes of livelihood and political institutions of*

a Nilotic people. Oxford University Press.

ファインマン, マーサ A.

2009 『ケアの絆：自律神話を超えて』穐田信子・速水葉子（訳）、岩波書店。

Foner, Nancy

1984 *Ages in Conflict：A Cross-cultural perspective on equality between old and young*. Columbia University Press.

Foucault, Michel

1995 『권력과 지식：미셸 푸코와의 대담』홍성민（역）, 나남. （1980 *Power/Knowledge：Selected interviews and other writings 1972~1977*. Colin Gordon (ed.), Pantheon Books.）

2001 『비정상인들：1974~1975, 콜레주 드 프랑스에서의 강의』박정자（역）, 동문선. （1999 *Les Anormaux：cours au Collége de France 1974~1975*. Gallimard.）

2011 『안전, 영토, 인구：콜레주드프랑스 1977~78년』심세광・전혜리・조성은（역）, 난장. （2004 *Sécurité, Territoire, Population：cours au Collège de France 1977~1978*. Gallimard.）

2014 『헤테로토피아』이상길（역）, 문학과 지성사. （2009 *Le Corps Utopique：suivi de les heterotopies*. Lignes.）

2015 『사회를 보호해야 한다：콜레주드프랑스 강의 1975~76년』김상운（역）, 난장. （1997 *Il Faut Défendre la Société：cours au Collège de France 1975~1976*. Gallimard.）

Fraser, Nancy and Linda Gordon

1994 A Genealogy of Dependency：Tracing a keyword of the U.S. welfare state. *Signs* 19 (2)：309-336.

Fry, Christine

1990 The Life Course in Context：Implication of comparative research. *Anthropology and Aging*. Robert L. Rubinstein (ed.), Kluwer Academic Publishers.

藤森克彦

2010 『単身急増社会の衝撃』日本経済新聞出版社。

藤田真理子

2003 『アメリカ人の老後と生きがい形成 ： 高齢者の文化人類学的研究』大学教育出版。

Gelézeau, Valérie

2004 『아파트 공화국：프랑스 지리학자가 본 한국의 아파트』 길혜연（역）, 후마니타스. （2003 *Séoul, Ville Géante, Cités Radieuses*. CNRS éditions.）

Hall, Edward T.

1966 *The Hidden Dimention*. Doubleday.

1990 *The Silent Language*. Doubleday.

ハンリム大学高齢社会研究所(한림대학 고령사회연구소)(編)

2010 『고령사회의 이해：노년과 사회（高齢社会の理解：老年と社会）』소화.

原武史・重松清

2010 『団地の時代』新潮社。

Hart, Charles W.M. and Arnold R. Pilling

1960 *The Tiwi of North Australia*. Holt, Rinehart and Winston.

Harvey, David

1989 *The Condition of Postmodernity：An enquiry into the origins of cultural change.* Blackwell.

橋本健二

2010 『家族と格差の戦後史：一九六〇年代日本のリアリティ』青弓社。

早川和男

1979 『住宅貧乏物語』岩波書店。

早川正夫

1969 「戦後」『住宅近代史：住宅と家具』太田博太郎（編）、雄山閣。

Hays, K. Michael

2003 『1968년 이후의 건축이론』봉일범（역）, Spacetime. （1998 *Architecture Theory Since 1968.* The MIT Press.）

Heidegger, Martin

1927 *Sein und Zeit*. M. Niemeyer.

ハイデッガー, マルティン

2008 『ハイデッガーの建築論：建てる・住まう・考える』中村貴志（訳・編）、中央公論美術出版。

Hetherington, Kevin

1997 In Place of Geometry：The materiality of place. *Ideas of Difference：Social spaces and the labour of division*. Kevin Hetherington and Rolland Munro (eds.), Blackwell.

平山洋介

2009 『住宅政策のどこが問題か：「持家社会」の次を展望する』光文社。

2011 『都市の条件：住まい、人生、社会持続』NTT出版。

広井良典

2009 『コミュニティを問いなおす：つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房。

Homer

1995 『일리아스（イリアス）』천병희（역），종로서적.

Holston, James

1989 *The Modernist City : An anthropological critique of Brasília*. University of Chicago Press.

本間義人

2004 『戦後住宅政策の検証』信山社。

2009 『住居の貧困』岩波書店。

稲葉陽二

2011 『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』中央公論新社。

石毛直道

1971 『住居空間の人類学』鹿島出版会。

井上治代

2003 『墓と家族の変容』岩波書店。

岩本通弥

1999 「死に場所と覚悟」『覚悟と生き方』岩本通弥（編）、筑摩書房。

2003 「方法としての記憶：民俗学におけるその位相と可能性」『記憶』岩本通弥（編）、朝倉書店。

2006 「口述／観察／非文字資料：民俗学研究の立場から」『史料学入門』東京大学教養学部歴史学部会（編）、岩波書店。

2007 「都市化に伴う家族の変容」『「家族」はどこへいく』沢山美果子・岩上真珠・立山徳子・赤川学・岩本通弥（著）、青弓社。

2013 「解説/解題 グリンデル高層住宅：団地暮らしの映像民族詩的接近」、マイケ・ミュラー『Die Grindelhochhäuser : Eine filmethnographische Annäherung an das Wohnen im Hochhaus（グリンデル高層住宅：団地暮らしの映像民族誌的接近）』ハンブルク大学民俗学研究所マギスター卒業作品日本語版DVD、東京大学大学院総合文化研究科 。

2015 「“当たり前”と“生活疑問”と“日常”」『日常と文化』1：1-14。

岩田規久男

2006 『「小さな政府」を問いなおす』筑摩書房。

イ・ヨンボム（이용범）

2013 「전통 죽음의례의 변화와 경향（伝統的な死の儀礼の変化や傾向）」『죽음의례 죽음 한국사회（死の儀礼・死・韓国社会）』이용범（편），모시는사람.

イ・ヨンジン（이영진）

2012 『전후　일본의　특공　위령과　죽음의 정치（戦後日本における特攻慰霊と死の政治）』서울대학대학원 인류학과 박사학위논문.

Jacobs, Jane

1961 *The Death and Life of Great American Cities*. Random House.

Jacobs, Jerry

1974 *Fun City : An ethnographic study of a retirement community*. Holt, Rinehart and Winston.

Jonasson, Jonas

2012 *The 100-year-old Man who Climbed out the Window and Disappeared*. Rod Bradbury (Trans.), Hyperion.

ジョン・ホンモク（정헌목）

2015 『가치 있는 아파트 만들기 : 수도권 대단지의 사례를 통해 본 아파트 공동체의 사회문화적 함의（価値のあるアパート作り：首都圏大団地の事例から見るアパートコミュニティの社会文化的意味）』서울대학교대학원 인류학과 박사학위논문.

ジョン・ジンホン（정진홍）

2013 「죽음의례와 죽음（死の儀礼や死）」『죽음의례 죽음 한국사회（死の儀礼・死・韓国社会）』이용범（편），모시는사람.

ジョン・ジンウン（정진웅）

2012 『노년의 문화인류학（老年の文化人類学）』한울아카데미.

ジョン・サンイン（전상인）

2009 『아파트에 미치다 : 현대 한국의 주거사회학（アパートに狂う：現代韓国の住居社会学）』이숲.

鎌田とし子

1999 『貧困と家族崩壊：「ひとり暮らし裁判」の原告たち』ミネルヴァ書房。

2011 『貧困の社会学：労働者階級の状態』御茶の水書房。

韓国老年学フォーラム(한국 노년학 포럼)（編）

2010 『노년학 척도집（老年学尺度集）』나눔의 집.

カン・デギ（강대기）

1981 『현대사회에서 공동체는 가능한가（現代社会でコミュニティは可能なのか）』 아카넷.

片桐雅隆

1996 『プライバシーの社会学：相互行為・自己・プライバシー』世界思想社。

片多順

1981 『老人と文化：老年人類学入門』垣内出版。

河野正輝

1981 『住居の権利：ひとり暮らし裁判の証言から』ドメス出版。

川床靖子

2013 『空間のエスノグラフィー：文化を横断する』春風社。

Keith, Jennie

1977 *Old People, New Lives : Community creation in a retirement residence.* The University of Chicago Press.

Kemeny, Jim

1995 *From Public to the Social Market : Rental policy strategies in comparative perspective*. Routledge.

キム・ヒキョン（김희경）

2003 『무료노인병원 환자 되기：노인 고통의 사회문화적 생성에 관한 연구（無料老人病院の患者となる：老人の痛みの社会文化的生成に関する研究）』서울대학교대학원 인류학과 석사학위논문.

2015 『“핀핀코로리의 비밀”：일본 나가노현 사쿠시에서의 생명정치와 노년의 자기윤리（「ぴんぴんころりの秘密」：長野県佐久市における生命政治と高齢者の自己倫理）』서울대학교대학원 인류학과 박사학위논문.

キム・ヒョンキョン（김현경）

2015 『사람, 장소, 환대（人・場所・歓待）』문학과 지성사.

木村徳国

1969a 「住宅洋風化と明治大邸宅」『住宅近代史：住宅と家具』太田博太郎（編）、雄山閣。

1969b 「明治時代の都市住宅：中産階級住宅の発生と中廊下形住宅様式の成立」『住宅近代史：住宅と家具』太田博太郎（編）、雄山閣。

1969c 「大正から昭和へ：居間中心形住宅様式の成立と昭和初期の中流住宅」『住宅近代史：住宅と家具』太田博太郎（編）、雄山閣。

木下康仁

2010 『文化と看護のアクションリサーチ：保健医療への人類学的アプローチ』医学書院。

小泉和子

1969 「家具」『住宅近代史：住宅と家具』太田博太郎（編）、雄山閣。

今和次郎

1945 『住生活』乾元社。

小山静子

1999 『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房。

Kübler-Ross, Elisabeth

2008 『죽음과 죽어감』이진（역）, 이레. （1969 *On Death and Dying.* Macmillan. ）

倉沢進

1990 「都市生活と集合住宅」『大都市の共同生活：マンション・団地の社会学』倉沢進（編）、

日本評論社。

Le Corbusier

1986 『아테네 헌장』이윤자（역），기문당. （1941 *La Carte d'Athènes*. Kraus Reprint.）

2002 『건축을 향하여』이관석（역），동녘. （1958 *Vers une architecture*. Vincent.）

2004 『프레시지옹：건축과 도시계획의 현재 상태에 관한 상세한 설명』，정진국・이관석（역），동녘. （1930 *Précisions Sur un État Présent de L'Architecture et de L'Urbanisme*. G. Crès.）

Lee, Yungjin

2015 Postwar Japan and the Politics of Mourning：The meaning and the limits of war experiences. *Seoul Journal of Japanesse Studies* 1(1)：89-113.

Lefebvre, Henri

2011 『공간의 생산』양영란（역），에코리브르. （1974 *La Production de l' Espace*. Éditions Anthropos.）

Liebow, Elliot

1967 *Tally's Corner：A study of negro streetcorner men*. Little, Brown.

Lim, Anna

2015 Constructing a Heterotopia of Migrant Space：'Weekend flat' and a sense of belonging among Filipino migrant workers in Tel Aviv, Israel. Ph.D dissertation, Dept. of Sociology and Anthropology, Tel Aviv University.

六車由実

2012 『驚きの介護民俗学』医学書院。

Low, Setha M. and Denise Lawrence-Zuniga (eds.)

2003 *The Anthropology of Space and Place：Locating culture*. Blackwell.

槇文彦

1999「ル・コルビュジエ シンドローム：日本の近代建築発展の過程において」『ル・コルビュジエと日本』高階秀爾・鈴木博之・三宅理一・太田泰人（編）、鹿島出版会。

槇村久子

2013 『お墓の社会学：社会が変わるとお墓も変わる』晃洋書房。

Matsumoto, Yoshiko

2011 Beyond Stereotypes of Old Age：The discourse of elderly Japanese women. *Faces of Aging：The lived experiences of the elderly in Japan*. Yoshiko Matsumoto (ed.), Stanford University Press.

Minois, Georges

2010 『노년의 역사』박규현・김소라（역），아모르문디.（1987 *Histoire de la Vieillesse*

en Occident : De l'antiquité à la renaissance. Fayard.)

Miller, Daniel

1988 Appropriation of the State on the Council Estate. *Man* 23(2) : 353-372.

三浦展

2007 『団塊格差』文藝春秋。

宮本みち子

2012 『若者が無縁化する：仕事・福祉・コミュニティでつなぐ』 筑摩書房。

宮本太郎

2005 「ソーシャル・ガバナンス：その構造と展開」『ポスト福祉国家とソーシャル・ガバナンス』山口二郎・宮本太郎・坪郷實（編）、ミネルヴァ書房。

宮内泰介（編）

2006 『コモンズをささえるしくみ：レジティマシーの環境社会学』新曜社。

成田龍一

2003 『近代都市空間の文化経験』岩波書店。

牟田和恵

1996 『戦略としての家族』新曜社。

中川清

1985 『日本の都市下層』勁草書房。

中沢卓実・淑徳大学孤独死研究会

2008 『団地と孤独死』中央法規。

波平恵美子

2004 『日本人の死のかたち：伝統儀礼から靖国まで』朝日新聞社。

NHKスペシャル取材班・佐々木とく子

2007 『ひとり誰にも看取られず：激増する孤独死とその防止策』阪急コミュニケーションズ。

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（編著）

2010 『無縁社会：“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋。

日本住宅会議（編）

2009 『格差社会の居住貧困：住宅白書2009～2010』ドメス出版。

Nisbet, Robert A.

1969 *The Quest for Community*. Oxford University Press.

1990 『현대사회의 정신사적 기초』강대기（역）, 문학과 지성사. （1986 *The Making of Modern Society*. Wheatsheaf Books. ）

西川祐子

2000 『近代国家と家族モデル』吉川弘文館。

2004 『住まいと家族をめぐる物語：男の家、女の家、性別のない部屋』集英社。
Norberg-Schulz, Christian
1980 *Genius Loci : Towards a phenomenology of architecture*. Rizzoli.
ノルベルグ=シュルツ, クリスチャン
1991 『建築の世界：意味と場所』前川道郎・前田忠直（訳）、鹿島出版会。
1997 『実存・空間・建築』 加藤邦男（訳）、鹿島出版会。
額田勲
1999 『孤独死：被災地神戸で考える人間の復興』岩波書店。
荻田武･リムボン
1989 『公営住宅・居住者運動の歴史と展望』法律文化社。
大本圭野
1991 『「証言」日本の住宅政策』日本評論社。
大岡頼光
2004 『なぜ老人を介護するのか：スウェーデンと日本の家と死生観』勁草書房。
太田博太郎（編）
1969 『住宅近代史：住宅と家具』雄山閣。
太田美穂
2010 「スウェーデンのイェムトランド県における地域創生の基盤づくり：「実現するもの」と「可能にするもの」の協働」『神戸学院大学人文学部紀要』30：215-229。
大月敏雄
2014 「近居の意義」『近居：少子高齢社会の住まい・地域再生にどう活かすか』大月敏雄・住総研（編）、学芸出版社。
2015 「住み方調査と“建築計画学”」『日常と文化』1：80-84。
大山眞人
2008 『団地が死んでいく』平凡社。
パルモア, アードマン・前田大作
1988 『お年寄り：比較文化から見た日本の老人』 片多順（訳）、九州大学出版会。
パク・スンヒョン（朴承賢）
2012a 「1DK의 마이홈：초고령사회의 가족과 주거（1DKのマイホーム：超高齢社会の家族と住居）」『次世代人文社会研究』8：227-241.
2012b 「「家庭の成立」から「団地族」の誕生まで：日本における近代家族と住まいの形成過程」『일본연구』54：63-83。
2015 「개호보험시대의 자립의 의미：도쿄의 한 개호예방시설을 통해 본 고령자 자립을 둘러싼 지역적 실천（介護保険時代の自立の意味：東京のある介護予防施設から見る

高齢者の自立をめぐる地域的実践）」『비교문화연구』21（2）：181-209.

Posner, Richard A.

1995 *Aging and Old Age*. University of Chicago Press.

Putnam, Robert D.

2013 『나 홀로 볼링：사회적 커뮤니티의 붕괴와 소생』정승현（역），페이퍼로드.（2000 *Bowling Alone：The collapse and revival of American community*. Simon & Schuster.）

Rapoport, Amos

2002 Spatial Organization and the Built Environment. *Companion Encyclopedia of Anthropology*. Tim Ingold (ed.), Routledge.

レルフ，エドワード

1991 『場所の現象学：没場所性を越えて』高野岳彦・阿部隆・石山美也子（訳）、筑摩書房。

Roth, Philip

2006 *Everyman*. Vintage.

Rubinstein, Robert L. (ed.)

1990 *Anthropology and Aging：Comprehensive Reviews*. Kluwer Academic Publishers.

齋藤純一

2000 『公共性』岩波書店。

Sandel, Michael J.

1982 *Liberalism and the Limits of Justice*. Cambridge University Press.

Saramago, José

2009 『죽음의 중지』정영목（역），해냄.（2005 *As Intermitências da Morte*. Companhia das Letras.）

佐藤浩司（編）

1998 『住まいをつむぐ』学芸出版社。

佐藤俊樹

2000 『不平等社会日本：さよなら総中流』中央公論新社。

Savage, Mike

2000 Walter Benjamin’s Urban Thought：A Critical Analysis. *Thinking Space*. Mike Crang and Nigel Thrif (eds.), Routledge.

Schoeman, Ferdinand David

1992 *Privacy and Social Freedom*. Cambridge University Press.

Schroer, Markus

2010 『공간，장소，경계：공간의 사회학 이론 정립을 위하여』정인모，배정희（역），에코리브르.（2006 *Räume, Orte, Grenzen：Auf dem weg zu einer soziologie des*

daums. Suhrkamp.)

Scott, James C.

2010 『국가처럼보기 : 왜 국가는 계획에 실패하는가』전상인（역）, 에코리브르. （1998 *Seeing Like a State : How certain schemes to improve the human condition have failed*. Yale University Press.)

関根康正（編）

2009 『ストリートの人類学（上巻・下巻）』国立民族学博物館。

関沢まゆみ

2013 「장례식의 변화와 영혼관의 변화 : 1930년대에서 2000년대 초반으로（葬儀の変化と霊魂観の変化）」『죽음의례 죽음 한국사회（死の儀礼・死・韓国社会）』이용범（편）, 모시는사람.

Sennett, Richard

2013 『투게더 : 다른 사람들과 함께 살아가기』김병화（역）, 현암사. （2012 *Together : The Rituals, Pleasures, and Politics of Cooperation*. Yale University Press.)

生活科学調査会（編）

1963 『団地のすべて』医歯薬出版。

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌：北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』風響社。

新谷尚紀

2006 「儀礼の近代」『都市の生活リズム』 新谷尚紀・岩本通弥（編）、吉川弘文館。

篠原聡子

2008 『住まいの境界を読む：人・場・建築のフィールドノート』彰国社。

2015 「東京マンションの展開と暮らし」『日常と文化』1：46-55。

島田裕巳

2010 『葬式は、要らない』幻冬舎。

Simmons, Leo W.

1945 *The Role of the Aged in Primitive Society*. Yale University Press.

塩崎賢明

2006 『住宅政策の再生：豊かな居住をめざして』日本経済評論社。

Sokolovsky, Jay（ed.）

1997 *The Cultural Context of Aging : Worldwide Perspectives.* Bergin & Garvey.

Sophocles

2008 「콜로누스의 오이디푸스（コロノスのオイディプス）」『소포클레스 비극 전집』 천병희（역）, 숲.

菅豊

2006 『川は誰のものか：人と環境の民俗学』吉川弘文館。

祐成保志

2008 『「住宅」の歴史社会学：日常生活をめぐる啓蒙・動員・産業化』新曜社。

Susser, Ida

1999 Creating Family Forms：The exclusion of men and teenage boys from families in the New york city shelter system 1987~1991. *Theorizing The City.* Setha M. Low (ed.), Rutgers University Press.

鈴木博之

1993 「ヨーロッパ、アメリカの近代・現代」『近代・現代建築史』鈴木博之・山口廣（著）、新建築学大系編集委員会（編）、彰国社。

鈴木成文・上野千鶴子・山本理顕・布野修司・五十嵐太郎・山本喜美恵

2004 『「51C」家族を容れるハコの戦後と現在』平凡社。

鈴木成文

2006 『五一C白書：私の建築計画学戦後史』住まいの図書館出版局。

橘木俊詔

2011 『無縁社会の正体 ： 血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか』PHP研究所。

橘木俊詔（編）

2012 『格差社会』ミネルヴァ書房。

高橋絵里香

2013 『老いを歩む人びと：高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』勁草書房。

武川正吾

1999 『社会政策のなかの現代：福祉国家と福祉社会』東京大学出版会。

2012 「グローバル化と個人化：福祉国家と公共性」『少子高齢社会の公共性』盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾（編）、東京大学出版会。

多木浩二

1976 『生きられた家』田畑書店。

天童荒太

2008 『悼む人』文藝春秋。

Thane, Pet

2012 『노년의 역사』안병직（역）, 글항아리. （2012 *The Long History of Old Age*. Thames and Hudson Ltd.. ）

Tönnies, Ferdinand

1957 *Community and Society*. Charles P. Loomis (trans. and ed.), Michigan State

University Press.

Torgerson, Ulf

1987 *Between State and Market : Housing in the Post-Industrial Era*. Turner, B., Kemeny,J. and L. Lundqvist (eds.), Almqvist and Wiksell International.

タウンゼント，ピーター

1974 『居宅老人の生活と親族網：戦後東ロンドンにおける実証的研究』山室周平（監訳）、垣内出版。

辻正二

2000 『高齢者ラベリングの社会学：老人差別の調査研究』 恒星社厚生閣。

Tsuji, Yohko

1997 An Organization for the Elderly, by the Elderly : A senior center in the United States. *The Cultural Context of Aging*. Jay Sokolovsky (ed.), Bergin & Garvey.

上野千鶴子

2002 『家族を容れるハコ家族を超えるハコ』平凡社。

2008 「ケアされるということ：思想・技法・作法 」『ケアされること』、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也（編）、岩波書店。

2012 『ケアの社会学：当事者主権の福祉社会へ』太田出版。

上野正彦ほか

1981 「老人の自殺」『日大医学雑誌』40（10）：1109-1119。

Varenne, Herve

1977 *Americans Together : Structured diversity in a midwestern town*. Teachers College Press.

山田昌弘

2004a 『パラサイト社会のゆくえ：データで読み解く日本の家族』筑摩書房。

2004b 『希望格差社会：「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房。

山本理顕

2013 「「地域社会」に住みたい」『地域社会圏主義』上野千鶴子・金子勝・平山洋介・仲俊治・末光弘和・Y-GSA・松行輝昌・山本理顕（著）、LIXIL出版。

山本理奈

2014 『マイホーム神話の生成と臨界 ： 住宅社会学の試み』岩波書店。

柳田國男

1975 『先祖の話』筑摩書房。

結城康博

2014 『孤独死のリアル』講談社。

2） 政府刊行物・地域資料

北区健康福祉部 高齢福祉課 2013『北区高齢者保健福祉計画（平成25年度～29年度）』。

北区まちづくり部住宅課 2009『北区住宅マスタープラン2010資料』。

北区政策経営部企画課 2013『北区人口推計調査報告書』。

北区社会福祉協議会（編）2001『暮らしの中のデイホームをめざして』。

北区史編纂調査会（編）1994『北区史：都市問題編』東京都北区。

北区史編纂調査会（編）1996『北区史：資料編現代2』東京都北区。

北区飛鳥山博物館（編）2003『団地ライフ：「桐ヶ丘」「赤羽台」団地の住まいと住まい方』。

北区都市整備部住宅課（編）2000『北区住宅マスタープラン』。

桐ヶ丘35年史編纂委員会 1981『桐ヶ丘35年史』北郊文化。

桐ヶ丘N地区第2自治会 2012『桐ヶ丘N地区第2自治会創立50年記念誌』。

公営住宅二十年史刊行委員会 1973『公営住宅二十年史Ⅰ』 社団法人日本住宅協会。

厚生労働省 2000『平成12年版厚生白書』。

厚生労働省 2005『平成17年版厚生労働白書 』。

内閣府 2012『高齢社会白書平成24年版』。

内閣府 2013『高齢社会白書平成25年版』。

内閣府 2014『高齢社会白書平成26年版』。

日本住宅公団（編）1965『日本住宅公団十年史』。

日本住宅協会（編）1973『住宅公団二十年史Ⅰ,Ⅱ』。

総務省行政評価局 2014『生活保護に関する実態調査結果報告書』。

総務省統計局 2003『平成15年住宅・土地統計調査』。

総務省統計局 2013『平成25年の住宅・土地統計調査』。

東京都福祉保健局 2013『平成25年度福祉・衛生統計年報』。

東京都北区 1986『戦後60年写真で語り続ぐ平和の願い』 。

東京都都市整備局 2010『都営桐ヶ丘団地建替計画の概要（第4期・第5期）』。

東京都都市整備局 2014『Publicly-operated Housing 都営住宅』。

東京都都市整備局 2015a『都営桐ヶ丘団地建替事業などの概要』。

東京都都市整備局 2015b『都営住宅の現状と公的住宅における取組事例』。

都市基盤整備公団 2004『赤羽団地を振り替える』。

3）映画・ドキュメンタリー

Maike Möller

2013 『Die Grindelhochhäuser: Eine filmethnographische Annäherung an das Wohnen im Hochhaus（グリンデル高層住宅：団地暮らしの映像民族誌的接近）』、ハンブルク大学民俗学研究所マギスター卒業作品日本語版DVD、東京大学大学院総合文化研究科。

NHK（制作・放送）

2010 『無縁社会：“無縁死”3万2千人の衝撃（NHKスペシャル）』（2010年1月31日放送）。

小津安二郎（監督）、野田高梧・小津安二郎（脚本）、山本武（製作）

1953 『東京物語』松竹。

滝田洋二郎（監督）、小山薫堂（脚本）、中沢敏明・渡井敏久（製作）

2008 『おくりびと』松竹。

Wiseman, Frederick (director, producer)

1997 Public Housing. Zipporah Films.

4）ウェブサイト

北区桐ヶ丘やまぶき荘ホームページ「施設の概要」

(http://www.seirouin.or.jp/yamabuki/outline.html, 2015.12.21 閲覧)

桐ヶ丘レポート「桐ヶ丘レポート2：都営桐ヶ丘団地魅力考・魅力1～3」

(http://3pomaniax.blog116.fc2.com/blog-category-30.html, 2016.1.10 閲覧)

厚生労働省ホームページ (a) 「地域包括支援センターの手引き」

(http://www.mhlw.go.jp/topics/2007/03/tp0313-1.html, 2015.7.21 閲覧)

厚生労働省ホームページ (b) 「平成26年公的介護保険制度の現状と今後の役割」

(http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000080254.pdf, 2016.2.3 閲覧)

東京都北区ホームページ「おたっしゃ事業」

(http://www.city.kita.tokyo.jp/kenko/koresha/kenko/jigyo/index.html, 2015.9.17 閲覧)

全国社会福祉協議会ホームページ「社会福祉協議会とは」

(http://www.shakyo.or.jp/about/index.htm, 2015.12.12 閲覧)